

## 絵巻物を使って武士の館をさぐる学習活動について

神奈川県 公立中学校教諭

### 1 絵画史料の大切さ

「歴史の授業は暗記だからつまらない。」「覚えることがたくさんあって、何を勉強したらよいかかわからない。」「何で歴史を勉強するの?」「言葉が難しい」など、社会科の中でも比較的生徒に人気のある歴史の授業も、語句を羅列した一斉授業に陥りがちになってしまい、なかなか生徒に意欲を持たせて取り組ませるのは難しい。歴史を深く理解するために必要な文字史料も、中学生には難しく、多くの生徒は、その資料集や教師の説明を覚えるだけにとどまってしまう。そこで、多くの生徒が自分なりの着眼点をもって、歴史を発見できる絵画史料を使って、グループ学習を行うことにした。現存する絵画史料(絵巻物)をもとに、生徒が様々な歴史的事実を発見、発表し、他の人の意見を聞いて「学び合い」や「教え合い」によって、自分の考えをさらに深めていく。それによって、歴史を追究する醍醐味を多くの生徒が実感し、次の課題追究にも結びついて学習意欲も高めることができると考えた。ここでは、中世の絵画史

料として非常に価値が高いとされている『一遍聖絵』の筑前国の武士の館を使って、絵画史料の学び方と話し合い学習の実践を報告したい。

### 2 絵画史料は大きく伸ばして

『一遍聖絵』(ひじりえ)は全12巻(清浄光寺、歎喜光寺蔵、ただし第7巻は東京国立博物館蔵)の絵巻物であり、第12巻奥書おくがきに正安1年(1299)8月、聖戒しやうかいが詞書ことばがきをつくり、法眼ほうがん門伊もんいが絵を描いたことを記している。中世の史料としても価値が高いとされ、縦約38cm、全巻合計すると12mを超す大作である。その中には、この時代の社会や経済、人々の生活の様子が細心の筆で写し出されている。

学習に使用したのは『一遍聖絵』の筑前国の武士の館である。この史料をA3判(カラー)の大きさに拡大し、グループごとに配布した。A3判の大きさは絵巻物の原寸に近いものである。絵画史料の学習には、当時の筆の線がわかるほどの大きさと鮮明さが必要で、それによって、生徒は多くの情報を手に入れることができる。

絵巻物やその説明は教科書でも取り上げられているが、それらの絵画史料を取り扱う時には、その絵に描かれている人物や、動物、その他様々な事物を取り上げ、その一つひとつがどのようなもので、名称は何か、どんな目的をもってそこにあるのかを考えさせることが大切である。さらに、他の事物との関係を想像させ、最後に、一つの絵画からどのような人々の生活が浮かびあがり、どのような目的でその絵が描かれたのかまで考えさせたい。しかし、授業の中ですぐに様々なものを発見することは難しい



せ、行動の様子を各自記入させる。この時「異時同図法」(同じ構図の中に、同一人物を異なった時点で複数登場させる図法)、「吹抜屋台」(屋根や天井を描かずに部屋の中が見えるように描く表現。源氏物語絵巻などを参照)などについて説明し、記入後シートを回収する。シートは忘れてたり、紛失したりするので、毎回提出させ、できればそのつど評価すると生徒の励みになる。

#### <2～3時間目>

図書室を使用し、6名ずつのグループに分かれ、司会者と発表者(最後にグループの意見を発表する者)を決める。『一遍聖絵』の絵画史料を中央に置き、各自で史料を観察する。教科書のp.63の『男衾三郎絵詞』や武家屋敷のイラストなども参考にしながらワークシートに自分の考えを書き出し、その後、グループ内でそれぞれ気づいたことを全員が発言し、意見交換しながら、課題3、課題4、課題5と記入していく。この時の時間の配分は、教師側が指示を行う。最後に課題1から順番に各グループの代表者が発表し、各自が自分のグループでは、指摘されなかった新しい気づきを加筆していく。特色ある意見や仮説については、



帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.63(『男衾三郎絵詞』)

絵画史料をもう一度確認させ、さらに疑問点を出させ、教師が補足する。

各グループの発表は、必ず行うことが重要である。発表に向けて、話し合いも充実し、個人のすばらしい仮説や意見がクラスで共有でき、各自が自分の考えをさらに深め、自分の抱く「武士らしさ」を再検討することができるからである。基本的にどのクラスも2時間でグループ発表まで終

わらせたのだが、もう少し時間が必要であると思われた。各自がじっくり絵画を観察し、仮説を立てながら意見交換を行い、記録するには厳しい時間配分であった。しかし、生徒の集中力を考えると、あと1時間程度が限界であろう。

#### <4時間目>

ワークシートのまとめの欄を記入する時間である。まとめは、一斉授業の形態で、生徒と意見交換しながら、課題1から順番に気がついたことを確認し、教師が補足説明していく。課題が進むにつれて、武士の生活や館の人々の役割が浮き彫りにされ、鎌倉時代のしくみを理解できるようになる。最後にグループでの話し合い学習についての感想を書く(ワークシート裏)。話し合い後の生徒たちの変化もわかり、今後教師側の指導や評価の参考にもなる。

## 4 まとめ

文字史料は中学生には難しいが、絵画史料は特別な知識や経験がなくとも、生徒が自分なりの課題意識をもって、自由に発想できるメリットは大きい。とくに中世以降の絵巻は、史料としての価値が高いものが多く、絵巻をじっくり眺めると、老若男女を含めた様々な人物や事物、建物、風景が描かれ、当時の人々の息遣いが聞こえてくるようである。生徒は歴史のその時や場面を想像しながら、一人ひとりが、自分たちの経験や知識を生かし、同一の史料から数多くの異なった事象を見つけ出すことができる。

そして、時にはそれぞれが違った分析や推論を試みることによって、生徒なりの合理的な歴史の解釈、歴史像の作成の過程を楽しむこともできる。当時の史料から直接、生徒たちが学びとることは、歴史学習で大切な要素であると考えている。

また、絵巻物の価値や、その「学び方」を学ぶことができれば、資料のもつ面白さに気づくようになり、今後、このような歴史資料について、自

分なりの視点で資料を解釈するようになり、歴史への興味・関心も高まるに違いないと考えられる。さらに、一枚の絵画を中心に置いて、みんなで、「ああだ、こうだ」と意見交換するのは、とてもよいコミュニケーションづくりになる。日頃話をしない友だちの新しい一面を発見し、相手への理解も深まるようである。

#### <生徒の感想から>

この「筑前国の武士の館」は客をもてなしている館の主人、一遍を迎える館の主人など時間差(?)を絵で表していて、私は本当にすごいと思いました。最初は、どうして同じ人が二人もいるんだろうと思い、不思議でした。そしてこの授業をし、この絵のなかの見つけられない部分も自分の班や他の班とともにさがし、武士の生活がよくわかったと思いました。絵を見ているだけで、「身分について」や「一遍と主人」についてもわかってしまい、本当に驚いてしまうほどのすばらしい絵なんだと私は思いました。そして題名は『一遍聖絵』で、題だけ見ると、「一遍」が中心の絵だとおもいますが、いろいろな発見ができる、まるで、宝探しのような絵でした。昔の絵から昔の様子を発見できる。そんな楽しいことが授業ででき、良かったです。班での話し合いは、みんなが一人ひとり意見を言えたので良かったです。私も前回よりも意見をたくさん言えました。もし、また話し合いがあるなら、今回よりも頑張ろうと思いました。とても楽しく歴史を学びました。

## 5 史料の見どころ

これは時宗の祖である一遍が、苦勞して九州を遊行していた途中の筑前国(福岡県)で訪ねた武士の館である。時は1276(建治2)年で、2年前に文永の役の蒙古襲来があり、九州は緊張した雰囲気包まれていた。

①ちょうど宴会中に一遍が突然訪れた場面で、一遍は左手に念仏札の束を持ち、そこから引き抜いた一枚を、右手で館の亭主に渡そうとし、亭主が丁寧に札を受け取ろうとしている。亭主は、

一遍を見つけると、急いで手を洗い、口をすすいで、庭に降りてきて一遍に対応したという。絵からは、烏帽子をつけ、身なりを整えている様子がわかる。授業の中で生徒が気づいたことだが、庭の一遍と亭主をよく見ると、亭主の左足、一遍の右足が浮いていて踊っているように(踊り念仏?)見えるが、未確認である。

②館の主屋<sup>しゅうぶく</sup>では、酒宴があり、真ん中が鼓をうつ遊女、向かって右が招かれた客、左が亭主である。館の構成は主屋と前庭、右手にあるのは副屋<sup>ふく</sup>で、性格がはっきりしないが、持仏堂ではないかといわれている。館全体が非常に開放的で、これは貴族の寝殿造の影響を受けているといわれる。

③副屋の裏手には網代塀が境になって、馬をつないでいる板敷きの厩がある。(板敷きなのは馬を大切にしている証拠と思われる。網代塀で厩がある空間と主屋の空間が分けられているのは下人と居住空間を仕切るためであろう。下人は館の住人の中で最も低い身分である。)その奥には馬場の柵が見える。

④館の周りは、頑丈な板塀がめぐらされ、弓矢や盾を備えた櫓の門がある。周囲は溝がめぐり、いわゆる「堀内<sup>ほりのうち</sup>」を形成している。左手は竹藪で筥もあり、武家屋敷に必要な不可欠な防御施設である土塁状の高まりも溝の内側に見える。竹は弓矢など合戦用の武器になった。さらに溝の外には生け垣で区切られた畑地が見られる。ここは直営地で、自分で耕したり、家人にさせたりしたものと思われる。

⑤館の中には、様々な動物がいる。厩には亭主の馬だろうか、2頭おり、下人(所従)がその世話をしている。猿は馬を守ると言い伝えられている。門前の馬は客人が乗ってきたもので、付き人が2人いる。主屋の右側には鷹狩り用の鷹がつながれている。また、持仏堂と思われるところに、犬が2匹いるのは番犬や猟犬と思われる。

⑥庭には主屋を警護する武士が、門前には館を警備する武士が控えている。武士の身なりを考えると、門前の武士の方が身分が低そうである。